

えんとう（遠島）・えんとうにん（遠島人）

江戸時代の刑罰のひとつで、陸地から遠く離れた島へ送ること、あるいは、送られた罪人を言う。追放よりも重く、死罪よりも軽い。平島と北隣の臥蛇島は種子島家領であったから、種子島から遠島の刑を受けて流されて来た。

遺されている記録は少ない。多くの場合は、赦免されて、帰省したのであろうか。墓石のひとつに、元禄十四年の碑文が遺っているが、こうした墓石を建てる習いは島にないから、恐らくは島外からの者、それも、平島で没した遠島人のものではなかろうか。石の質がどの地の産なのか、分からない。マエノハマへの道を下って、別府助市の家のハマ寄りにある。シモダの日高清吉の家の、ハマミチを挟んだ反対側に墓所がある。集落からマエノハマに向かって右手になる。

名前が知っている遠島人に、高崎孫平衛がいる。種子島家の人で、孫兵衛一栄助一栄次郎一栄熊一清彦一仙之助（仮名）一〇夫一〇一郎と続く。孫兵衛は七年の遠島生活を許されて、種子島へ帰るのが嘉永二年（一八四九年）である。現地妻の子どもである栄助は島に残り、日高家のひとつを継ぐ。それがオーエである。船頭屋敷とも呼ばれている、島の中心的な存在である。正月二日の船祝はこの屋敷でやるが、そのときに振る舞う肴を準備するために、イケンタという田で鯉を飼っていた。周囲を漁場で囲まれている島で、淡水魚を賞味したという。

二代目の栄助は士分格を与えられ、刀を二本差ししていた。平島では他に刀を差ししていた人はいなかった。親の七光りよろしく、栄助だけに与えられた栄誉である。トンジュウという重役に就けたのも血筋が大きく働いたことだろう。明治の時代に代わっても差ししていた。戸長制度ができたのが明治八年であり、川辺郡の役所が知覧に置かれたのだが、そこに所用で出かけているが、そのときも差ししていた。廃刀令が施行されたのは翌明治九年である。これは孫の栄熊（明治一五年生まれ）の証言である。わたしは、この栄熊に昭和四十二年の一月に会っている。

### 運動会

これは平島小中学校が主催する秋の大運動会のことである。学校行事ではあるが、部落、つまり集落を挙げて参加する。老人も幼児も参加する。家々では、重箱に詰めた昼食を持参する。それで、開催日は定期船の十島丸が鹿児島から下って来る翌日が最適である、と見なされている。そうでないと、重箱へ入れるオカズが不十分である、との不満が調理する主婦たちから漏れてくる。それほど、島外、特に鹿児島からの食材に頼っている。もともと、現金の流通が少なかった昭和四十二年以前は、こうした不満は聞かれなかった。芋や粟が主食であり、オカズも島内で調達していた。

## サイバン

漢字で書くと、「裁判」となるが、これは一種の脅し文句の中で使われるコトバである。現実の裁判沙汰になったことはない。「そげなこと(無理難題)を言うとなら、サイバンに訴えっど！」と、相手を脅せば、「おお！ 訴えんかあー！ サイバンが怖くあるもんか！」と、やり合う。そんな口げんかのあとには、仲直りのイザケをまつることがある。

どちらかに手落ちがあれば、焼酎を入れたビンを提げて、謝りを入れることもある。例えば、飼っているヤギが綱をほどいて、近くの畑の作物を荒らしたとすると、荒らされた側は、損害の補償を求める。実際には、「焼酎を提げて」謝りに出向く。損害額がどんなに多くとも、そして、焼酎代がどんなに安くつこうとも、これ以外の手打ちの方法は考えられない。焼酎はイザケ、つまり、神酒であり、それを酌み交わすことで、すべての問題は解決される。

## フレモン・フレムン

気がふれた人、つまり、狂気にとりつかれた者。「シンケイになっている」人、という表現があるが、これは神経が冒されている人、という意味ではなく、異常なほどに気をもんでいる人、あるいは、緊張の度合いが気ぐるいするほど高まっている人のことを言う。

## しら

ラ行音とヤ行音の音韻変化がみられて、「しや」ともいう。丘に座る舟を浜に降ろしたり、ぶたたび海から浜に引き揚げたりするときに用いる丸太のことをいう。シラの直径は、おおよそ一〇センチ前後で、長さは一・五メートル前後である。これを線路の枕木状に地に並べて、その上を舟が滑るようにする。シラ木に直接触れる部分は竜骨といって、船底に縦に打ちつけた木である。舟を岩や、その他の障害物から護るためのものである。取り替えが可能な部材である。

舟はハマから海に向かうときは、舳先を前にして進む。後方に残されたシラは、人間の手で拾われて、次々と舳先の方に並べ加えられる。だから、移動距離が長くても、二〇～三〇本のシラが用意されていれば十分である。反対に海からハマに曳き揚げるときは、艫の方を先にする。

シラはシュラが変化したものであろう。日本の各地で、巨石を移動させるための具として、古くから木ぞりを使っていたが、これを「修羅」という。巨石を梵帝釈天に見立て、それを動かすほどの力は阿修羅、すなわち、修羅にしか備わってはいない、と人は見たのであろう。

阿修羅は仏教を守護する八種の神的なもの(八部衆)の一つともされている。

好戦的な側面があり、たとえば血なまぐさい戦闘の場のことを修羅場といたり、修羅の甚などとよぶ日本語として定着した語があることからそれが理解される。また、能楽では、戦闘の場面があらわれる作品を修羅物という。奈良の興福寺には有名な阿修羅王の像がある。その姿は、目に怒りを含んではいるものの、好戦的なおそろべきイメージはすて、むしろ女性的である。